

あかしびと 106号（クリスマス号）2022年12月発行  
日本バプテスト同盟金沢文庫キリスト教会  
☎236-0046 横浜市金沢区釜利谷西3-36-20 tel/fax 045-783-5475  
（牧師）森島牧人・森島恵  
（教会）church.kanazawabunko@gmail.com  
（ホームページ）kanazawabunkochurch.sun.bindcloud.jp

### 「クリスマスの喜び」

森島 牧人

誰もがクリスマスの出来事を描いた絵やカードを見たことがあると思います。

飼葉桶に寝かされた主イエスの側には母マリア、その横に夫ヨセフが立っています。反対側にいるのは、天使の知らせを受けてやってきた羊飼いたちです。たったこれだけの人と、動物たちに囲まれて祝われた、静かな誕生日、それが最初のクリスマスです。

主イエスがお生まれになったのは、イスラエルの町ベツレヘムの馬小屋です。ヨセフとマリアは、ローマ皇帝が出した住民登録の命令に従って、生まれ故郷へ帰る旅の途中でした。宿屋に泊まる場所がなく、馬小屋へ追いやられて一夜を過ごし、そこで主イエスが誕生されたのです。誰だって、馬小屋に泊まりたいとは思いません。みんなきれいな部屋に泊まりたいし、快適に過ごしたいのです。だから馬小屋で生まれた子供を、顧みる人は一人もいなかったのです。しかし、この馬小屋の赤ちゃんは、神さまのお子さんです。あなたのために、この世に来てくださったのです。

神さまはいるのか、と人々は議論します。神がいるなら、どうして世界はこんなに悲惨なのだ。神さまなんかいないんじゃないか、という人も、少なくありません。でも神さまはおられます。確かにおられます。神さまは、馬小屋の中に、この世の一番低いところに、おられるのです。この幼な子は、そのしるしでした。

わたしたちも、この世の馬小屋へ追いやられることがあります。世の中の流れから、取り残されて、望みを失うことがあると思います。そういう時に、この赤ちゃんを思い出してください。誰にも顧みられないところにひとり立っている、絶望だと思った時に、あなたは神さまの一番近くにいるのです。

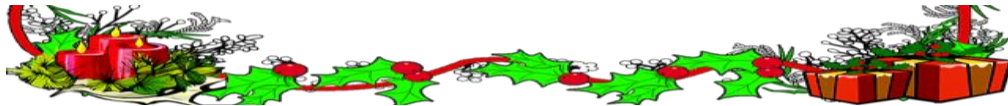
クリスマスは、神さまからのお約束です。私はあなたを見捨てない！と、聖書はそれを語っています。





## 目 次

|                        |          |      |
|------------------------|----------|------|
| 「クリスマスの喜び」             | 森島 牧人 牧師 | p.1  |
| 「あなたも新しく歩み直せる」         | 森島 豊 師   | p.2  |
| 教会創立記念日礼拝 説教 「キリストの使者」 | 澤野 寛 師   | p.4  |
| 「神様の宝物」                | 白根 義輝    | p.5  |
| 「小さな命のお友達」             | 石川万奈美    | p.6  |
| 「なぜ、あなたはここにきたの」        | 白井 豊子    | p.7  |
| 「命のパン」                 | 岩垂 周太.   | P.9  |
| 「雑 感」                  | 梅谷 興三    | p.10 |
| 「クリスマス・イヴの思い出」         | 犬塚 志朗    | p.11 |
| 教会学校の紹介                |          | p.12 |



### 「あなたも新しく歩み直せる」

マルコによる福音書 15章 21節

森島 豊 先生 (青山学院大学宗教主任)

8月14日主日礼拝 (オンラインで放映、各自は自宅で礼拝を守りました)

私たちの誰もが生きて行く中で、「なんで私が、私の家族だけがこんな目に遭わなければならないのか」と思わせられる事態に遭遇します。今日の聖書は「そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。」(マルコ 15 : 21) と記されていますが、ここにまさに自分の不運を嘆かざるを得なかった男が登場しています。

当時、過越祭のためにエルサレムに行くことは、エルサレムから離れたところに住むユダヤ人にとっては一生に一度あるかないかの一大事でした。シモンも長い間かかってお金を貯め、やっと願いが叶ってこの時エルサレムにやって来ていたのです。初めて見る都のあれこれに目を奪われていたシモンでしたが、すぐ近くに人だかりがしていることに気が付きます。その人だかりに割り込んだ彼の目に入ったのは十字架を担いでこちらに進んで来る一人の男の姿でした。しかもあろうことか、その男がシモンの前で倒れてしまったのです。男を引いて来た兵士たちは、そこにいた体格の

良いシモンに、男に代わって十字架を担ぐように命じます。ローマ兵に逆らえないことを知っていた彼は仕方なく十字架を担いで男の後ろを丘に向かって歩き出しますが、彼の心は人だかりに気を留めず真っ直ぐ神殿に向かっていけば良かったとの後悔の念で一杯でした。本来なら神殿で祝福を受けているはずの自分が汚らわしい罪人の十字架を背負わされている・・・なぜ自分だけがこんな目に遭うのか、シモンにはどうしても納得が行かなかったのです。

聖書はシモンがキレネ人であり、アレクサンドロとルフォスの父親であると紹介しています。これは教会の人々が彼らの名前をよく知っていたということを意味しています。ロマ書16:13には「主に結ばれている選ばれた者ルフォス、およびその母によろしく。彼女はわたしにとっても母なのです。」とあり、使徒13:1には「アンテオキアでは、その教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、・・・」とあります。ニゲルとはニグロ・黒人ということで、シモンはアフリカ人であることが分かるのですが、それと同時に彼がパウロの異邦人伝道の最初の宣教団の一員であったことも明らかになっています。パウロによって異邦人にもたらされた福音、シモンはその伝道の働きの重要なメンバーであり、教会の重鎮であり、その家族も教会の中心的な存在であったのです。

そんなシモンがキリスト者になったきっかけは、彼が我が身の不当な運命を嘆きながら主の十字架を背負った時にありました。呪いの言葉を呟きながらの最悪の状況の中で彼が見たのは、民衆から罵倒され蔑みの言葉を浴びせられながら、それに対して一言も返さずただひたすら処刑場に向かって歩き続けるその人の背中でした。その時彼を捉えたのは、自分が代わって担いでいるこの十字架をこの人もまた誰かのために担ぎ、これからその十字架にかかろうとしているのではないかとの思いでした。

十字架を担ぎ終え、その場を離れて過越祭に身を置いても彼はそのことを考え続けました。そんな中で十字架にかかって死なれたナザレのイエスが復活されたという噂を耳にします。「ああ、やはりあの人は自分の罪のためではなく誰かの罪のために十字架を担い、その十字架上で亡くなられたのだ」と理解した彼は教会を訪ね、あの人について行こうと決心してバプテスマを受けます。教会の人々は主イエスに代わって十字架を担いだ彼を大きな喜びと共に迎えました。そしてそのことは代々シモン一家の誇りとなったのです。

私たちの上にもなぜ私だけがこんな目にも思わざるを得ないことが起こります。しかしその時私たちは神の働きに深く関わる事が出来ているのです。私の母方の祖父母は戦時下、キリスト教会への見せしめとして軍部から凄まじい迫害を受けたホーリネス派の伝道者でした。多くの伝道者が逮捕投獄され拷問にかけられるという国家政策によって二人は伝道者を辞めざるを得なくなります。これは祖父母にとって最悪の事態でした。しかし、そのことがあって私は戦時下の教会の受難を研究する者となり、牧師になったのです。

苦しみのない人生はありませんが、主イエスのおられない人生ありません。無駄な苦しみなど一つもないのです。辛い日々にも働いたあなた、キリストの体を支えたのはそんなあなただったのです。神はそのような仕方で私たちを用いてくださるのです。 (教会員による要約)



10月16日 教会創立記念主日礼拝 「キリストの使者－使徒の選任、役割－」

(マルコ福音書3:13~19)

澤野 寛師

先日は創立記念礼拝にお招きいただき、み言葉の解き明かしのご奉仕に与ることができ感謝でした。その礼拝においてはマルコ福音書3章13節だけを取り上げ、私共が「キリストの使者」として召されていることの恵みをお話いたしました。今回犬塚兄より、改めて要約したものを、字数を削って教会季刊誌「あかしびと」のために書いてほしいということでしたが、以下3節の「**山に登って**」と「**呼び寄せて**」という言葉についてだけ記します。

まず「**山に登って**」ということですが、「山」はマルコ福音書では特別な意味があるのではないかと思われまふ。「山」に関しては「山上の変貌」(9:2~)の記事が顕著です。「イエスは高い山に登られた」と記されています。そこでは主イエスはご自身の栄光を十字架と復活に先んじて3人の弟子たちに啓示しておられます。マルコ福音書にはありませんが、マタイ福音書では「山」といえば「山上の垂訓」が良く知られていますが、「イエスは群衆を見て山に登り」(マタイ5:1)との書き出しです。「山上の垂訓」は単なる道徳訓ではありません。それは新しい神の御旨の啓示であるといえます。さらにマタイ福音書の結びに「11人の弟子たちは、イエスの命じられた山に登った」(マタイ28:16)と記されており、その後弟子たちに世界宣教への召命が与えられております。どうやら福音書では「山」という時に、特定の「山」が考えられているような気もいたします。しかしそれが同じ山かどうかはあまり重要ではありません。たとえ違う山であっても、福音書での山の記述がある時には、ある同一性格の出来事を暗示しているように思えるのです。聖書釈義辞典では「山はマルコ福音書では民衆の目に隠されている啓示の出来事の場合である」と説明されています。ある説教者は「山とは単に人里離れた場というだけでなく、明確な意識をもって神の前に立つ場である」と語っております。「山」は、前段落の主イエスを追いかけてきた「群衆」(3:9)と対比されるようにして、主の弟子たちが、その他大勢としてではなく、個性をもった一人一人の人格として主イエスに会い、主イエスと交わり、主イエスから特別な啓示を、特別な召しを与えられる場だったのです。この山上でキリストにある新しい世界が開かれ、キリストにある新しい出来事が彼らに生じたのです。

次に「**呼び寄せて**」という語ですが、原語では「カレオー」という語(英語では「call」)で、「呼ぶ」「召す」「招く」(マルコ1:20)と訳されています。「呼び寄せられる」は「プロス」(「~へ」の意)という前置詞との合成語で「プロス・カレオー」という語が用いられています。私どもが主イエスのもとへと招かれたこと、さらに主の御業へと召されていくことなどを意味する語です。

アルバート・シュヴァイツァーが40歳になって召命を受け、医療伝道を志したのですが、友人たちは反対して彼のオルガンの恩師ヴィドール先生所に行き、「なぜあなたは彼を止めなかったのですか」と尋ねたそうです。その時ヴィドール先生は「神様が呼んでおられるのに、どうして私が止めることができるでしょうか」と答えたそうです。

このように「主に呼ばれた者」すなわち召命を受けたものはシュバイツァーだけではありません。たとえシュバイツァーのような大きな働きはできませんが、私どもキリスト者は皆、キリストの者として召され、そのみ業の参与へと招かれた者です。私どもは生涯のうち、私共の内側から「何事かをなさねばならない」という内面の声が聞こえてくることがあります。ある学者は「内面の促し」と呼んでいます。それを聖書的表現でいうなら「主イエスが呼び寄せておられる」ということになります。使徒達は主イエスに呼ばれて使徒となりました。私共は使徒ではありません。しかし私共も形は違いにしろ、主イエス・キリストに呼ばれて、召されて、キリスト者となり、世に遣わされているのです。

教会を表す原語は「エクレシアー」ですが、これはエク(「~から」の意)と召命を表す「カレオー」の名詞形合成語で「~から呼び集められた者」という意味です。キリスト教会は本来は「教える会」ではなく、主イエスによって、この世から主によって呼び寄せられた者の共同体なのです。

13節には、主は「これと思う人々を（み旨によって）呼び寄せられる（召される）と」、この主イエスの召しに応じて「彼らがそばに集まってきた」ことが記されています。主の招きに応じて主のもとに集まったのです。まさにエクレスシアとしての教会、「主によってまねかれ、召されて、主のもとに集められた」教会を示唆していると言えます。

この私共金沢文庫キリスト教会もまた主によって呼び寄せられて集められた教会であることを深く受け止めたいと思います。



#### 「神様の宝物」 白根 義輝

「みなさんの一番大事なものを、宝物は何ですか？」と聞かれたら、何を思い浮かべるでしょうか？ 普段、そういうことを考えることは、あまりないかもしれません。それぞれ大事なものを、宝物は違うと思います。たくさんあるのでどれが一番大事か決められないという方もいるでしょう。

テレビで見た一休さんのお話ですが、お殿様と奥方様が喧嘩をしました。喧嘩の原因は覚えていませんが、とにかく大喧嘩をして、怒った奥方様がお城を出ていくことになりました。そして奥方様はお殿様に、「何か宝物を一つ持っていきたい。」と言いました。お殿様は、「ああ、何でも好きなものを持っていくがいい。」と答えました。

さて、奥方様はどんな宝物を持っていこうとしたのでしょうか？

それは、お殿様と奥方様の可愛い子供でした。その子供を連れてお城を出て行こうとすると、お殿様は、びっくりしました。てっきり、きらきら輝く美しい宝石や、高価な着物などを持っていくと思っていたからです。ところが、お殿様にとって大事な子供を連れていくというのですから大慌てです。お殿様は奥方様に、「宝物を持って行っていいとは言ったが子供を連れて行っていいなどと言っていないぞ。」と怒りました。

そこで、奥方様は、こう言いました。「昔から、子供は、子宝と言うじゃありませんか。ですから、宝物である子供を連れていきます。」これを聞いたお殿様は、ぎゃふんとなり奥方様に謝り許してもらいました。

これは勿論、一休さんのアイデアです。



親にとって子供は宝物です。ですから、愛する自分の子供が病気にかかり、苦しんでいる様子を見るのは本当に辛いものです。できることなら子供の代わりに自分が病気になって助けてあげたいと思います。子供が助かるのなら、自分はどうなってもかまわないとさえ考えるものです。

以前、岸という牧師さんが、息子さんに、こんな話をしたそうです。

「もし、お前とお父さん、二人のうち、どちらか一人しか生き残れないとしたら、お父さんは、どうすると思う。一秒も考えないで、お前が助かるように決めるよ。」と息子さんに言ったそうです。

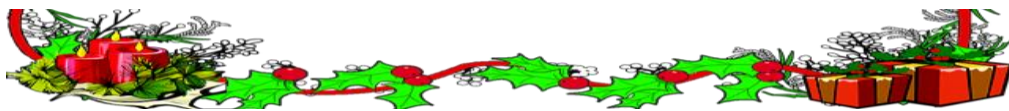
それほど親にとって子供はかけがえのない自分のこと以上に大切なものなのです。

神様はイエス様を私たちに送ってくださいました。大事な大事なたった一人の子供、宝物であるイエス様です。その神様が愛するイエス様が十字架にかけられると分かっていたのに、私たちのために送ってくださったのです。

神様から見て、私たちにいったいどんな価値が、どれほどの値打ちがあるのでしょうか？「わたしの目にはあなたは価高く貴い」と神様はおっしゃいます。神様が創られた全部の人が、神様にとってものすごく大切なんですよ、とおっしゃるのです。宝物のように愛してくださるということです。

私たちのために、私たちの罪を赦すために、私たちが一人も滅びないように、イエス様がお生まれになったのです。

今年も当たり前のようにクリスマスがやってきます。今年のクリスマスは、みんなが、イエス様を救い主としてお迎えする特別なクリスマスになるようにしてくださいと祈ります。



## 「小さな命のお友達」

石川万奈美

私は一人っ子として育ちましたが、今、この歳になるまで寂しいと感じた事はありませんでした。何故ならば常に周りに多くの小さな友達がいました。

その友達とは、たくさんの小さな生き物たちです。

その生き物たちとは本当に数えきれない程の思い出があります。

私の幼き頃にはまだまだ周りには自然がたくさんありました。物心付いた頃、東京の大田区馬込というところに住んでいました。まわりは原っぱや小さい丘がたくさんあり、バッタ、かまきり、コオロギ、蟬、ダンゴムシ、トカゲ、今思えばどんな生き物たちともよく遊びました。

特によく覚えているのが、地蜘蛛の巣をとり、中からむっちりとした小さい地蜘蛛を取り出すのが楽しかったことです。とてもかわいいと私は思っていたのですが、私のまわりや、虫嫌いな人からは嫌がられてしまうかもしれません。

小学生になると、近くでお祭りがある度に祖母にお小遣いを貰い友達と出かけていきました。

そこには、ハツカネズミ、様々な色に染められたヒヨコがたくさん売られていました。母からは「生き物はもうたくさんいるからお世話が大変だから駄目！」とくぎを刺されていたのですがこの小さな子たちを目の前にして黙って帰れるわけがありません。買うとポケットに入れて帰り引き出しで飼うことにしました。二日目の深夜、母の悲鳴で目が覚めました。ハツカネズミが脱走したのです。これには大目玉をくらいました。

また、ある年のお祭りではピンクと黄緑の色付きヒヨコが欲しく2羽を箱に入れて貰い小躍りで帰りました。諦めた両親は電球で温められるヒヨコの家を段ボールで作ってくれました。しかしかわいいヒヨコはすぐに色が取れて朝にはコケコッコと鳴きだしました。

そうしてその2羽の姿は数日後に学校の飼育小屋に移る事になりました。

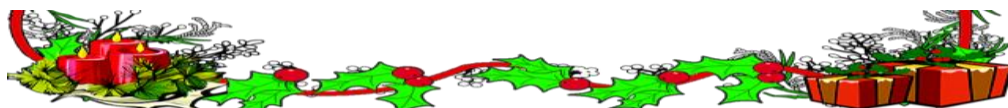
他には小学校の時、学研の「科学と学習」というような名前の月刊誌を購読していましたがその付録がすごい物でした。ある時は「解剖セット」というものが付録で虫や魚の体の仕組みを調べようというものでした。ピンセットやハサミなどが入っていた記憶があります。近所の小山の頂上の野原の切り株の上で鮎を持ってきてくれた友達とブラックジャックのように解剖をしました。小さな命・・・けれども神様の造られた命は繊細で緻密で素晴らしいものでした。神様はよく考えられて造られたのだとしか思えません。

現在、我が家には16歳半と11歳のシニア犬2匹がいます。16歳半の子は足腰弱り踏ん張る力も弱り歯周病で腫れたり耳も聴こえなくなりオシッコの失敗

も頻回です。

然し、食欲はすごく、若い時よりも性格も丸くなり表情も豊かでとても愛おしい存在です。

私はこれからも神様の造られた小さな命と仲良くして小さくとも神様の愛を感じて共に、今を生きてゆこうと思います。



「なぜ、あなたはここに来たの」

白井 豊子

人生を振り返った時、思い出すことがある。それは新たな事を始めようとして赴任した時、  
「なぜ、あなたはここに来たの？」

と、否定的な排除されるような言葉を投げかけられたことである。しかも、それは三度もあった。故郷の石巻を出て、九月の採用で横須賀に来た時の事である。最初の赴任校での九月二日の保護者会の折に、まず投げかけられた言葉だった。

二回目は横須賀市初の院内学級設立のために赴任した時、校長と看護婦長からなげかけられた。三回目は初めて特別支援級設立をするためにあたって赴任した学校で、保護者から投げかけられた。

どうしてこんなにも投げかけられたのか、不思議でもあり、当時の事を振り返ってみた。

二回目の院内学級設立の事を記してみたい。

横須賀市で院内学級をつくるにあたり、推薦を受けて私は意気揚々な想いで赴任した。40代半ばのことである。30代には六年間私立の病院にあった院内学級で担任をしていたので、その経験がかわれたのだろう。

しかし赴任時に児童は、ぜん息やアトピーでずっと不登校であったI君一人だけだった。病院内に一区画設けられた教室とベットサイドでの学習とで進められるのだ。私のほかに市から派遣された非常勤職員が二人、交互に来るようになっていた。

私は赴任するとすぐ、病院近くにある私の籍とI君の籍とがある学校に挨拶に行った。すぐに校長が、

「I君がいなくなったら、先生はどうしますか？」

と、思いもかけない質問が出された。長期入院のために転校する子が来なければ、在籍児がいなくなるので、私の身分も危ういということなのだ。

「その時々、一生懸命やりながら考えます。」としか、私は言いようがなかった。ショックだった。

確かに、I君のような長期入院児童はなかなか現れず、看護婦長からも

「この病院は急性期の患者対象であり、入れ替わりが多い方が病院にとっては良いのです。だから、もともと院内学級とは相いれないので、設置に対しては私たちは皆反対だったのです。」

と言われた。

教育委員会の係の方からは

「在籍児童確保のために、病院にもっと働きかけてほしい。そうでないと、あなたは病院内学級担任としてはいられなくなります。短期の子は非常勤の方に任せて、あなたは学校のお手伝いにまわるしか無いかもしれません。」

と言われた。

二週間以上入院する場合は転校手続きをとり、正式な院内学級児童となり、私がお子さんの担任になるという仕組みだが、そこまで入院する子は少ないし、どの子もできれば転校まではしたくないのだ。病気で辛い思いをし、かつての仲間からも離れて寂しい思いをしている子にとって一時的にしる、転校手続きをすることは仲間からも切り離されるような思いになるのではないかと思う。二重学籍制とかで、もっと大らかな制度づくりはないのだろうかと思う。

教育委員会にかけ合っても何ら前向きな対応はなされなかった。文科省の入院児童対策をされている先生が夏期講習で名古屋の方に来られることを知った。私はそこに行き、懇談会の折に相談した。短期入院児童の教育保障と学籍の関係について語り、入院児童の作品を中心に毎日つづっていた学級便りを見せてもらいながら聞いて頂いた。

その事が功をなした面もあったのか、その後、たとえ一日であっても、一時間だけであっても、院内学級での学習が保証されるあり方になり、私自身も院内学級のリーダーとして在籍に関係なく病院での学習に向かえるようになった。

看護婦さんやお医者さん、保護者からも子供たちの笑顔を見るのが多くなったと好評であった。治療にも良い効果があるとも言ってもらえた。この病院に合った形での学習が定着していったのだ。



校長も私が院内学級を辞す前の卒業式の時、院内学級での子供たちの感動的出来事を紹介してくれた。

新たな事への挑戦には反撥はつきものなのだと思います。反撥する側の話に耳を貸しながらも願いに向かって進むとき、助け手と出会えたりして、新たな展開へと向かえると思った。反撥されることは試練ではあるが、超えていくべき課題が与えられ、成長するための訓練の機会が与えられたのだと思える。



また、高慢に陥ることのないよう、試練を与えられたとも思える。次の二箇所の聖句が真実の言葉として、常に励ましてくれる。

コリント I 10 : 13

神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう逃れる道をも備えていてくださいます。

ローマ 5 : 3

わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。



「命のパン」

岩垂 周太

「自分が何者であるかを人に伝えることを自己紹介といい、イエス様はご自身をいろいろな形で自己紹介されています。」と冗談も交えつつ、礼拝で話が始められたときは、私はすっかり話に引き込まれました。積極的に礼拝に参加してもらおうという形のお話の展開にびっくりでした。そしてその自己紹介の意味するところ、つまりイエス様が「私が命のパンである。」と言われたことには、イエス様に従う人たちにご自分のことを知ってもらおうという意味とともに「私のところにきて、私に従いなさい。そうすれば飢えることはない。」とお伝えになるためでした。

私たちは必ず一日に三食たべることで空腹を満たします。しかし、私たちはおなかだけではなく、心も空くのです。何か上手くいかない、勉強ができない、喧嘩をしてしまった。この世で生きてい

る中で、必ず起こることで、そのせいで心のなかがもやもやします。これをイエス様は取り去り、安らぎを与えてくださいます。

実は命のパンを食べるという意味をわたしは、それまで知りませんでした。礼拝でみ言葉を聞くということが、命のパンを頂き信仰を強めて、永遠の命にあずかることができるということは知っていましたが、自分でとらえた感想があまりにも抽象的過ぎて、はっきりとは分からなかったのです。これは聖書の中でイエス様にパンをもらおうとした群衆も私と同じであったと思います。彼らは一時の空腹を満たすためにイエス様にパンをもらいに行きましたが、イエス様はその群衆に教えるために「私が命のパンである。」とおっしゃられたのです。

自己紹介には「私は」と「私が」の二つがあります。「は」で終わるほうはまだ知らない人に向かって初めて紹介するときに使います。しかし、「が」で終わるほうは、すでに聞いたことはあるが、確定していないときに紹介するときに使います。イエス様は「が」を使っておられます。これは群衆もイエス様も「パン」というものだけはお互いに知っていましたが、「命のパン」と「食べるパン」という決定的な違いがあったからだと思います。そして私の一番の思いは、命のパンは私たち人間と神様を結ぶ生命線だということです。必要な時にだけ命のパンを頂くのではなく、いつもいつも頂き続けて魂に刻み込むことが、イエス様に向き直って祈るためには欠かせないものではないかと思いました。一週間み言葉を聞かなくなり、二週間み言葉を聞かなくなると、神様を忘れてしまう。そして神様を戸の外に締め出し、扉を叩かせてしまうことになります。

私もこのみ言葉を聞いて、「命のパン」をその日その時まで絶え間なくいただけますように。そして主を信じ、命の限り信仰生活を続けられますようにと祈ります。



## 「雑感」

梅谷 興三

私たちの教会水曜集会「キリスト教入門講座」での最近のテーマは『キリストにならいて』で、大体 10 人位の出席者に恵まれている

著者はトマス・ア・ケンケンピスということであるが、正確には不明なるも現在ではほぼトマスであろうといわれている。時期は 15 世紀でトマスが 61 歳の頃の作品。書かれた背景はよくはわからないが、発端は修道士の日常の心得として書かれたといわれて、単にカソリックの修道士のためばかりでなくプロテスタントにも参考にするに値すものといわれベストセラーとなった古典といわれている。つまり何回も熟読しているうちに深い意味が体得されるというものである。一見してやや暗い。この世のことは空しく徒労に過ぎず、ひたすら主に忠実に仕えなさいという結論のようである。

15 世紀の修道士ならともかく、20 世紀に生を受け、いまだに過酷な戦争を繰り返すいまの世で

もこのまま、世捨て人になるには、まだ未練がある。イエスは本当にそういう生き方を望んでおられるのだろうか。たとえ僅かでも、被害を減らす方向に協力できないものか。カソリック現代作家遠藤周作による「イエスの生涯」等も参考にしながら学んでいきたい。



## 「クリスマス・イヴの思い出」 —幻想の世界—

犬塚 志朗

「若者は幻を見、老人は夢を見る」使徒言行録2:17、ヨエル3:1 いつの間にか私は老人の域に達しました。「これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び・・・」(へブル11:13) 過去の「聖夜」の思い出をふり返りました。

クリスマス・イヴの星空の下、キャロリングとして各家庭(特に高齢の方々)を訪問し、入り口で静かにクリスマスの賛美歌を唄ってお祝いをしました。時には深夜、年中行事として依頼されたクリスチャンホームでの祝会(親・子・孫も集まって)に参加したこともあります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「聖夜」のひと時を夏山坂上の私たちの教会(旧会堂)で過ごしました。教会は800mほど緩やかな坂を登った丘の上にあります。だから私にとっては下界ではありません。

そこでクリスマス前夜の燭火礼拝に参加、明かりを消して、蠟燭の灯を頼りに、讃美歌、聖書朗読、牧師の説教に耳を傾けます。そこで天使の歌声、救い主誕生の物語を心に描きます。

礼拝後は会堂階下で簡単なお祝いの茶話会がありました。初めての人にも、信者でなくても歓迎



されています。一年ぶりに再会する人もいました。クリスマスのお祝いの茶菓をいただきながら、近況報告をし、互いに旧交を温めます。各々の人の談笑のひと時です。



外は厳しい冬の寒さでも室内では熱気で身も心も温かく、下界での苦しみ、悲しみもその時は隠れています。

終了後、深夜遅く、星空の下、教会から私は坂を自転車で下って行きましたが、その当時は民家が少なく、下方一面を見渡すことができました。そしてその下方の世界に目を奪われました。ちらちら光る明かり、一般民家にもクリスマス・イルミネーション

で飾られていました。走る自動車の前照灯と後尾灯、少し遠方には八景島で一日の終了の花火が上がり、さらに遠くには東京湾が霞んで見えます。上空は星空。静と動の美の調和を味わいます。全く沈黙の世界です。でも私の心の中で響いているのは、次から次へと流れる喜びの唄、さやかに星澄む今宵・・・、きよしこの夜、星はひかり・・・、そしておまけに年末のベートーベンの歓喜の唄まで・・・ 心は朗らか 喜び満ちて / 心は楽しく 幸せ溢れ / 響くは我らの喜びの唄。今宵は全世界で久しく待ち続けた救世主誕生の夜、懐かしい思い出の一コマでした。私は夢の世界に入っていますので、クリスマス・イヴと年末がごちゃ混ぜになってました。



教会学校ではいろいろな工夫がなされています

在籍 17 名（3 歳～15 歳）こどもたちは、毎週兄弟姉妹そろって CS に来ています。礼拝では、こどもたちが喜んで司式の役割や献金当番を引き受けています。礼拝プログラムは、漢字のすべてにルビを付け、誰でも読めるようにしています。当番を引き受けたこどもは、礼拝堂の正面に置かれている講壇でとても立派に司式をしています。

ほとんどのこどもたちが礼拝で、十戒・使徒信条の告白・主の祈りをすっかり暗誦し、さんびかを覚えて歌います。

分級ではみんな一緒に工作をしたり、卓球を楽しんでいます。11 月からは、クリスマス・リース作りを始めました。最近では、ピアノを習っている子どもが、さんびかを弾いてくれるようになりました。



小さな奏楽者の誕生です



5月には礼拝後近くの公園で新緑に囲まれて神様の祝福の下、保護者の方と飲物、茶菓配布



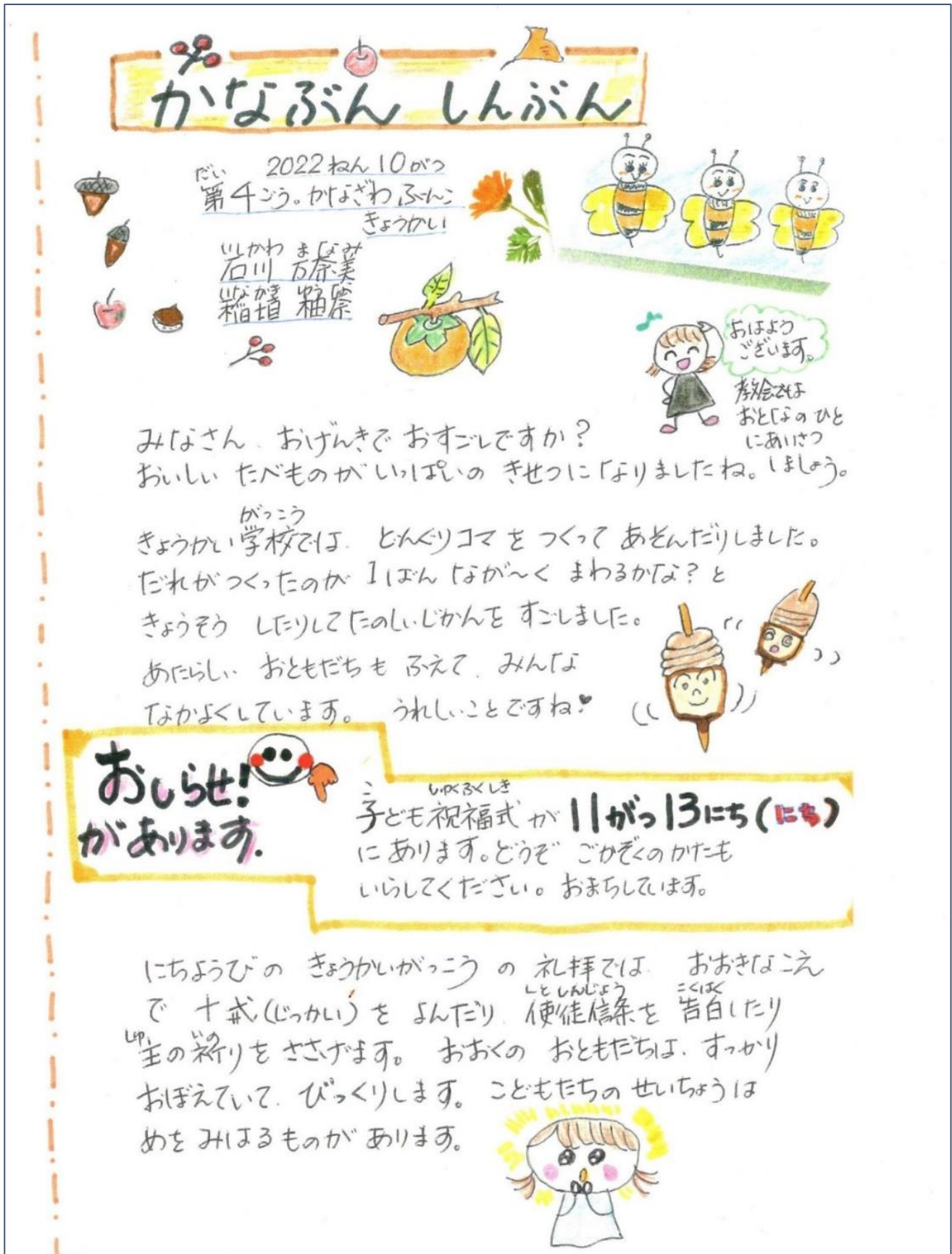
バドミントン



教会学校では子供たちの新聞「かなぶん しんぶん」が、毎月発行されています

実物はカラーで素敵です

石川万奈美さんと稲垣柚奈さんが編集をしています。カットも石川さんによるものです。丁寧にルビを入れて、こどもが読めるように配慮されています。



こんかいは 前回について 8月18日に 行われた  
 関東部会 青少年 育成 委員会。夏の一日 修養会に  
 金沢文庫教会から 高校生の 上野彩愛さんが  
 参加してくださり 感想文を 書いてくださいました。

日々 さえさん ありがとうございます。

今回 私は夏の修養会に参加しました。干前中は鶴見にある  
 沖縄県人会の方に お世話になりました。鶴見 川崎町と  
 沖縄のつばかりが 最初によくわからなかったのですが 川崎には  
 絹織工場がありそこで沖縄からきた人が 働いていてそこで 働く人の  
 おおくが鶴見に住んでいたそうです。また 現在の 問題点や 県人会の  
 文化をお話いただきました。そのあと 県人会の 下にある 沖縄物産店へ  
 行って 私は サーターアンダーギーを かいました。そのあと 沖縄料理店  
 で ソーキそばを 食べました。両方とも とてもおいしかったです。  
 食べ終わったあと 大師 新生教会へ 行き リモートで 沖縄の  
 教会の 牧師さんの 話を聞いたり。沖縄を 発信している  
 新聞で バックをつくりました。他にも たくさんの人と 出会って  
 仲良くなって とても 楽しい 修養会 でした。

文 上野彩愛  
 代筆 Ewa's 石川 万奈美

彩愛さんは今  
 おとよの礼拝に毎週  
 出席されています。



インフエツガ  
 流行しそうです。





主 日 礼 拝 日曜日 10:30～12:00 (教会学校 9:00～10:30)  
キリスト教入門講座 水曜日 10:30～12:00 テキスト:「キリストにならいて」トマス・ア・ケンピス著  
賛美歌を歌おう会 木曜日 10:30～12:00 健康体操、発声練習、賛美歌練習、祈祷会  
毎月第二木曜日は講師を招いて実施  
隔月最終木曜日は講師として元東京音楽大学教師指導によるシニアのための健康コース

### You Tube で礼拝を受信する方法

\*金沢文庫キリスト教会は、礼拝を YouTube Live で配信しております

以下の教会 ホーム ページ から見る事が出来ます

<http://kanazawabunkochurch.sun.bindcloud.jp/WORSHIP.html>



各号の「あかしびと」カラー版は教会 ホーム ページ、機関誌に掲載されています

### 編集後記 (広報委員会:記 犬塚志朗)

今年度主題聖句 「あなたの重荷を主にゆだねよ 主はあなたを支えてくださる」詩 55:23  
を掲げて出発しました。が、世界に飛び交う悲しいニュースと未だに終息の兆しの見えないコロナ  
禍、第八波到来、で心が沈みそうです。このような時にこそ神様を信頼して、希望を抱いて歩んで  
いきたいものです。

これまで多くの方々のお祈り、ご支援をいただき感謝申し上げます。クリスマスと新年を迎えるに  
あたり、皆様に神様の御加護、豊かな祝福がありますようお祈りいたします。在 主



